

テーマ： 9 私たちの活動報告

「南多摩病院における院内デイケアの取り組み」

医療法人社団永生会南多摩病院リハビリテーション科

佐藤雅晃 長谷川好子 高尾恵 岩崎彩芽 羽生樹理 石川愛理

二次救急医療を担う当院では2013年度よりリハビリスタッフが中心となり集団活動の場として「院内デイケアみなみな会」を実施しています。今回は2014年度の取り組みの紹介をさせていただきます。

「院内デイケアみなみな会」の目的は、医療処置目的での行動制限に伴う身体機能、認知機能低下によるADL能力の低下を予防することにあります。活動は病態が安定し離床が可能となった患者様を対象に、月曜日から金曜日の昼食後の45分間、病棟のデイルームを使用しOTスタッフが中心となり運営しています。その内容は5、6人の小集団にて日付の確認や体操、レクリエーションを行っています。

院内デイケアに参加するにあたっての一連の流れは、スタッフ間にて連携をとり、前段階としてPTスタッフが患者様を車いすへ移乗させ、STスタッフが摂食訓練や評価を行った後、引き続き離床が必要な患者様がそのまま参加される場合とOTスタッフが直接患者様を車いすへ移乗させ集団活動のみに参加される場合があります。

今回、2014年4月から2015年3月までに内科病棟に呼吸器疾患にて入院し退院された方の内、リハビリテーションが処方され入院時・退院時のFIMに欠損のなかった148名を対象に院内デイケアに参加した群65名（平均年齢：83.9±7.8歳，男女比：男性24人女性41人）と院内デイケアに参加しなかった群83名（平均年齢：78.0±9.8歳，男女比：男性49人女性34人）にてFIMにおける各項目の改善点を比較検討しました。結果としましては、院内デイケアに参加した群・参加しなかった群の2群間において食事・移乗（ベッド・椅子・車いす）・社会的交流における改善点に（ $P < 0.05$ ）有意差を認めました。

今回の結果から院内デイケアに参加するにあたり必要となる一連の動作や活動がFIMにおける運動項目、認知項目の一部を改善させる役割の一端を担っている可能性が示唆されました。直接的に関わった食事、移乗（ベッド・椅子・車いす）にて有意な差を認め、さらには院内デイケアという集団活動の場を提供することで社会的交流に有意な差を認める結果となりました。急性期でも入院前の生活に相似した環境での直接的な介入が重要ではないかと考えます。